

博士論文執筆経験談

平成25年3月修了生 李 紅実

はじめに

博士論文の執筆談の依頼があった時、自分の経験が本当に参考になるかとかなり迷った。しかし、自分が在学中に先輩たちの経験談を聞いて勇気付けられたことを思い出し、この経験談が在学している方に少しでも役に立てれば良いと思い、引き受けることにした。

博士課程の5年間を振り返って

1年目：子連れして登校する新入生。博士課程に入学した時、子供は4ヶ月になったばかりで、保育園は決まらず、預けるところもない状況だったので、当然1年休学を考えた。しかし、指導教員と相談したところ、休学せず、子供を連れて授業に参加するように勧められた。結果、1年目は主指導教員の授業だけを取り、授業のときは子供をつれて参加することになった。幸い、一緒に授業に参加した他の院生たちも理解してくれた。授業以外にも、授業と同じ日にあった修士課程の論文ゼミにはできるだけ参加するようにした。

その後、7月から保育園の入園が決定されたものの、修論を提出した後の疲れ、さらに育児のことに追われる日々だったので研究はほとんど進まなかった。それでも、休学せず、研究の場から離れなかったことが何より幸いであった。さらに、1年目にできたことは、関連学会への入会、入会した学会での口頭発表、院生連携研究プロジェクトへの参加などがある。

2年目：やっと本気で研究に向かう姿勢を整えるようになった。きっかけになったのが10月の合同ゼミに参加したことであった。自分と一緒に入学した同期の院生たちと交流する中で、かなり多い人がすでに査読論文を1本持って、2本目の準備を進めていると聞き、良い刺激になった。焦りもあったが、自分も頑張ろうという決心もついた。交流の中で、投稿論文の書き方などよい情報も沢山得られた。中でも、自分に有益だったのが「学校教育学研究論集」に投稿することであった。修士論文をベースに資料と論を再構成し、「学校教育学研究論集」へ投稿し、2010年10月号への採択が決まった。

3年目：現地への調査。論文を完成するための調査は全部で3回に渡って行った。最初の2回は予備調査という形で行われた。3回目はある程度論文の枠が出来上がって、調査対象や内容も絞って行われた。

4年目：妊娠と休学。2本目の投稿論文がなかなか決まらず、精神的にも限界になっているときに、妊娠したことが分かった。そこで、指導教員と相談し、1年の休学を決意した。ただし、出産までには毎週1~2回学校に来て、論文の指導を受けることにした。休学決

定後に2本目の投稿論文の採択が決定された。

5年目：復学と最終的挑戦！副指導教員の御退官、経済的な問題などどう考えても最後のチャンスだと思った。そこで、再び赤ちゃんを連れて学校に行くことになった。復学後、指導教員と時間を決めて定期的に論文の指導を受けることになった。その後、9月には副指導の先生を含めて3人の教員による見極め、11月には5人の先生による予備審査、12月には論文提出、2月には公開審査など、ハードなスケジュールで進行した。

論文完成に役に立ったもの

(1) つながり～指導教員、研究室の後輩および院生同士

まず、自分の状況を理解してくださった主指導と二人の副指導の先生方、論文審査を受け入れてくださった二人の先生方に感謝する。つぎに、毎回論文を投稿する前に日本語のチェックをしてくれた同じ研究室の修士課程の後輩たちに感謝する。修士論文も博士論文も、同じ研究室の修士課程の後輩が日本語のチェックを丁寧にしてくれた。最後に、連合の先輩や同期生たちとの繋がりを通して、経験談、情報、悩みを分かち合って力を得られたことが最後まで頑張れる一つの力になった。

(2) 院生連携研究プロジェクト

1年生の時、主指導の先生が指導教員になっている院生連携研究プロジェクトに参加することができた。2年、3年生の先輩たちが中心だったので、先輩たちと研究の進み方、調査前の資料の準備、訪問先の連絡方法などを学ぶことができた。2年生の時には、埼玉大学の先生と院生が中心になったプロジェクトに参加した。

二つの院生連携プロジェクトを通して得られたのは、1) 自分の研究だけではなく、より広い分野の研究に携わったこと、2) 院生同士の繋がり、指導教員と共に現地調査に参加し、調査の手法などを勉強できたこと、3) 調査の経費の面で支援を受けられたこと、4) 2つの報告書、1つの紀要論文という業績を残したこと、である。

おわりに

論文執筆の中で最も大変な時期、成功の反義語は失敗ではなく諦めることだという助言を聞いたことがある。つまり、どのような状況であっても、諦めない限り必ず乗り越える方法はあるはずということであった。実際、私の場合はそうであった。休学した1年を含めて2年もオーバーしたが、諦めず挑戦した結果、論文を完成することができた。皆様も諦めず自分の限界に挑戦し、是非良い論文を仕上げることを応援する。